

第一分科会

「育ちをささえる」

～こどもの豊かな育ちをささえる支援者になろう～

発達全体の像をおさえる

2019年10月23日

うめだ・あけぼの学園 副園長

作業療法士 酒井康年

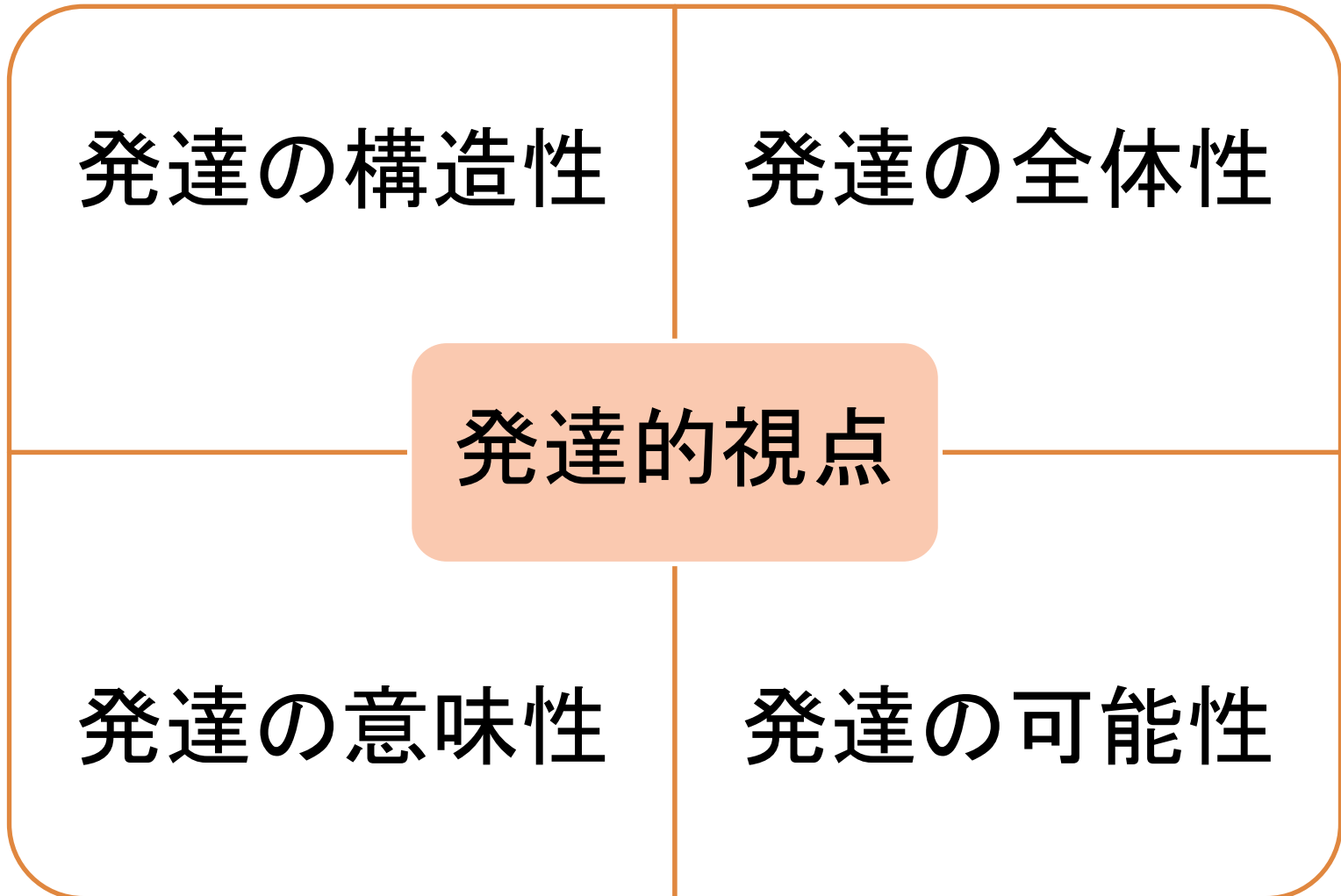
自己紹介を兼ねて ～うめだ・あけぼの学園について

- 東京都足立区にある児童発達支援センター
- 1977年2月に設立。
- 0歳児から小学校3年生までの約300名の発達障害のあるお子さんと、そのリスク児が通園。
- その他、保健所、児童相談所、医療機関、保育園、幼稚園、関連支援機関などから紹介され、診断・評価・相談に来園。
- モンテッソーリ法
- 0歳からの発達支援と家族支援。
- 様々な職種によるチームアプローチ。



発達全体像

発達の視点



発達の構造的な重視

- 「できないことをできるようにし、できることを増やすといった行動を量的に捉えることではなく」
- 「質的に発達を考えようとする立場」
- 「つまずきのもつ構造的な意味を考えよう」
- 「直線的・連続的」な考え方から「構造的・螺旋的」な考え方へ

発達の構造的性の重視

例) スキップができない

- 歩いていない赤ちゃんにスキップは？
- 赤ちゃんでもスキップを練習すれば、できるようになる？
- スキップができるようになるための条件とは？
- 立てる、ジャンプができる、リズムがとれる、左右の協調性、体幹の自由な運動

発達の全体性の重視

- 「ありとあらゆる視点を網羅し、できる限り詳細に記述することに力」をかけることではなく
- 「子どもの発達の本質を読みとる視点のもとで、いかに行動がおさえられるか」

発達の全体性の重視

例) ASDの方は、なぜ不安を感じるのか

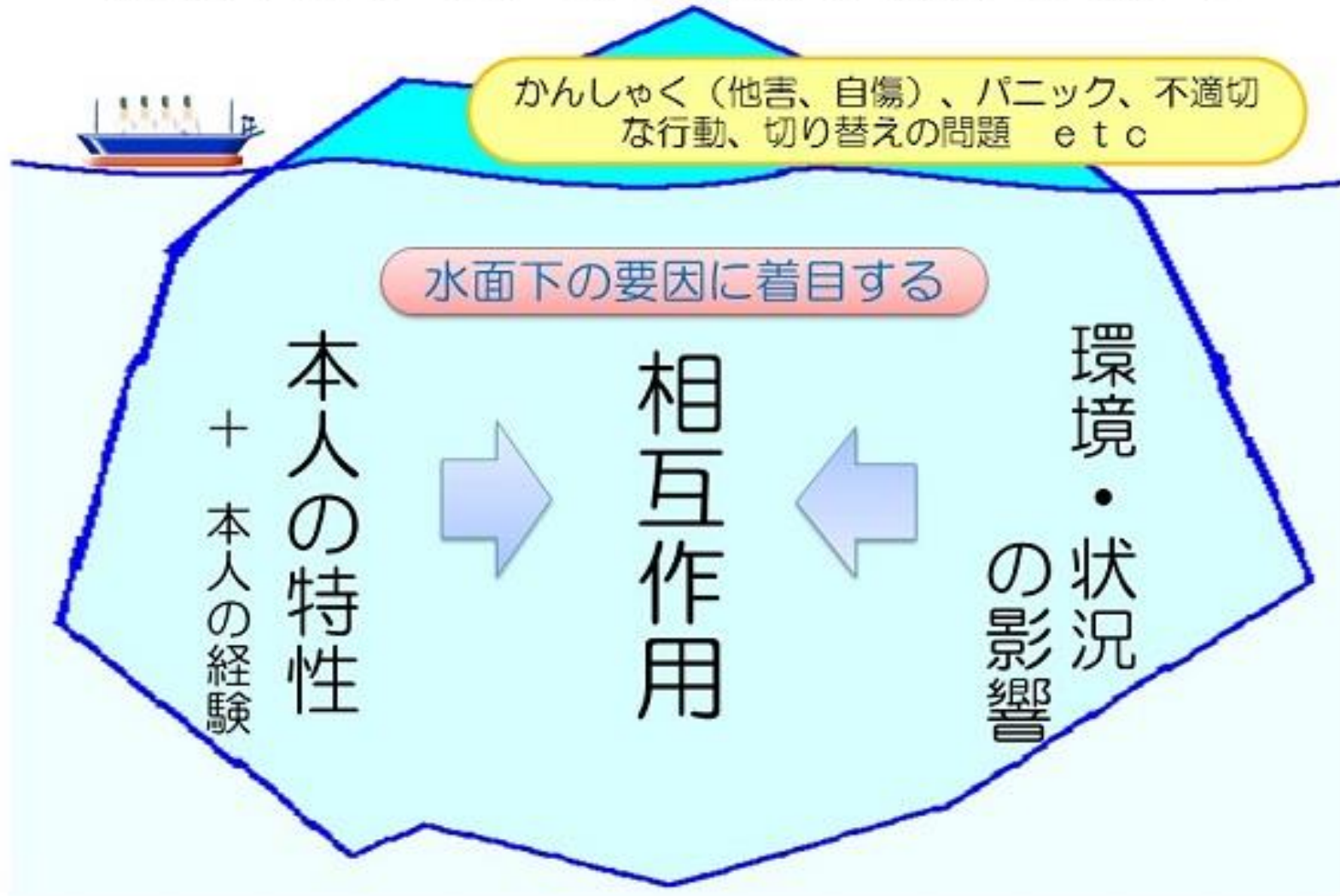
- イメージが苦手
→見えないことを想像しにくい
- 汎化しにくい
→過去の経験を参考にしにくい
- セントラルコヒーレンスが苦手
→過去の経験から法則性や意味を抜き出すことの苦手さ
- パターン性への親和性
→パターンが見つけれられないことだけで不安になりやすい
- 注意の範囲が狭い
→起きている事象の全体像を見にくい

これらのことが混ざり合って

- 起きている現象を、広い視点で情報収集し、安直なパターンではなく、相手の気持ちも考えながら理解しようとすることの苦手さへ
- 結果として、自分なりの解釈になりやすく
- 蓄積されることによって、訂正されないことによって、被害妄想的になりやすい

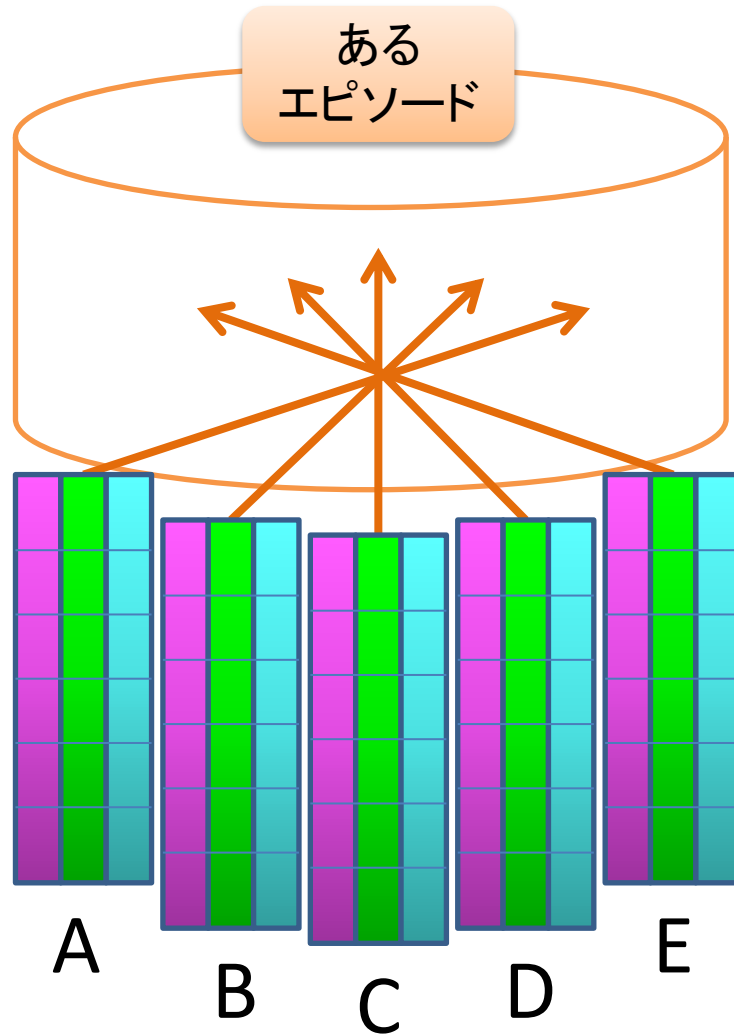
発達の構造を捉える

冰山モデルで考え 活用する！



- 水野敦之
- 『「気づき」と「できる」から始めるフレームワークを活用した自閉症支援』／水野敦之著 エンパワメント研究所
- HP: BOUZAN NOTE !! <https://bouzan-note.com/>

発達の構造的理解



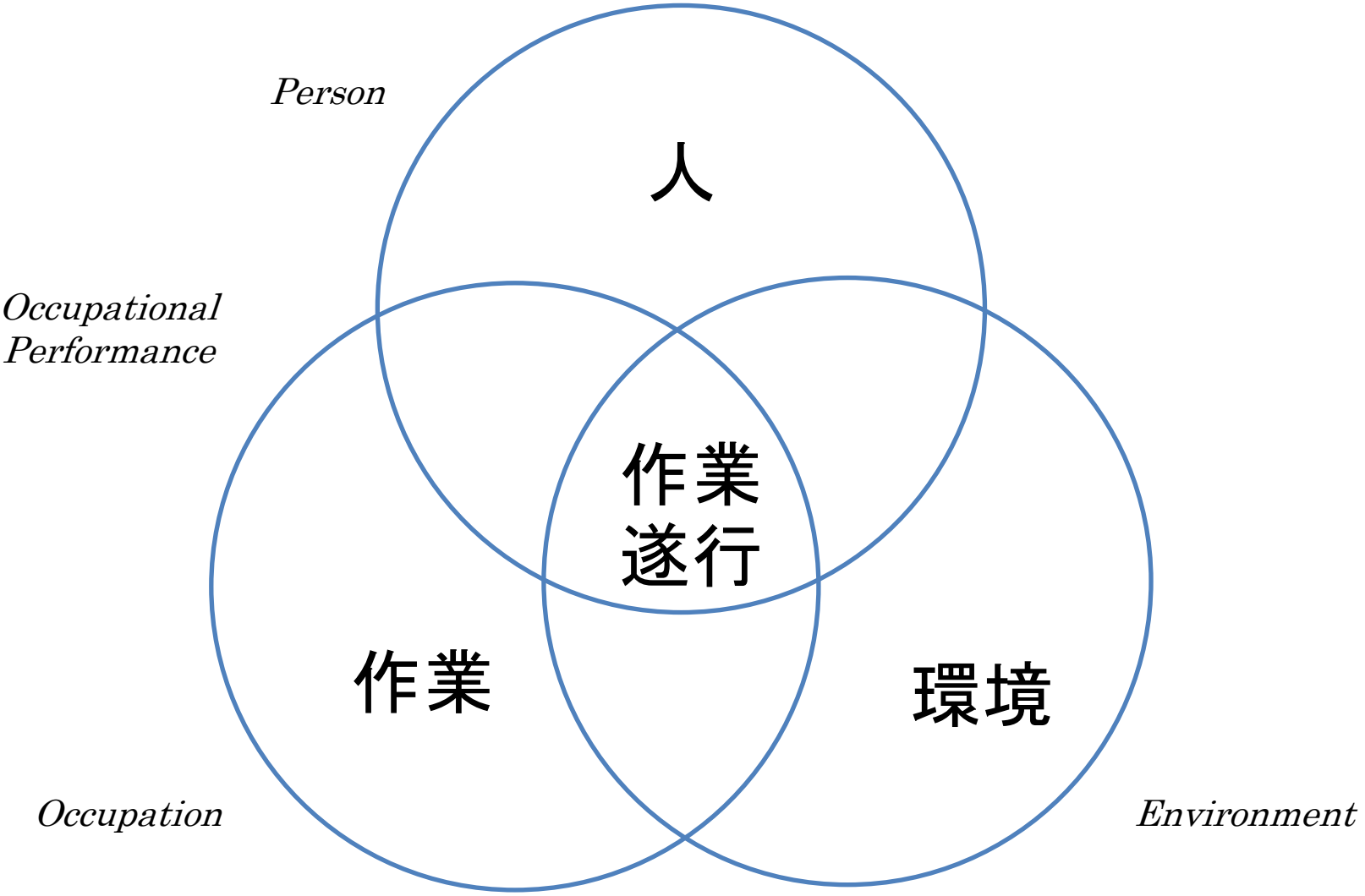
発達の視点とは

- 今、子どもが見せている姿・行動を、複数の視点や複数の専門性で把握する
- それぞれの視点、それぞれの専門性の立場にあつて、発達的に変化する観点から、変化する時間軸を把握する。
 - 評価は時間軸に沿った中での現時点を把握すること
 - 同時に、そこまでの道筋である過去と、今後の育ちの歩みである未来もみておく
- 発達の視点＝現在の状況を立体的・構造的に把握する
 - 今を水平横断的(複数の視点・専門性)に把握すること
 - 今を時間軸に沿って縦断的に把握すること

作業療法士の視点

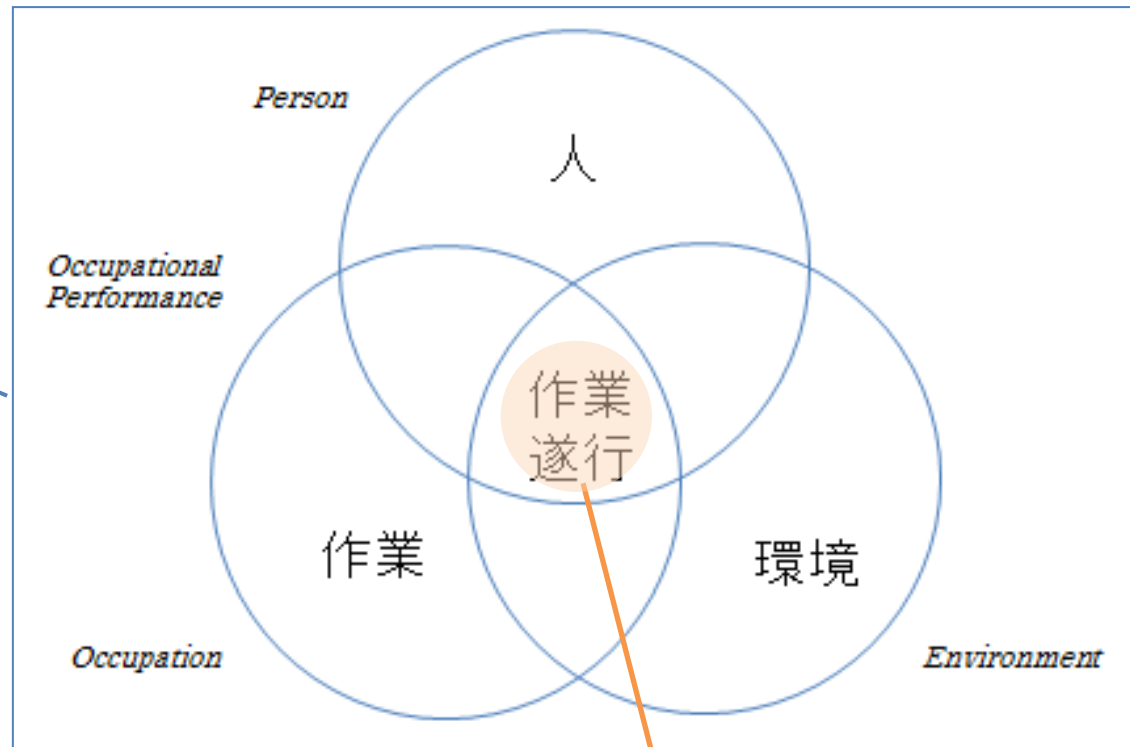
**発達の視点に立ち
子どもの力を把握するために**

作業療法の視点 P-E-O model



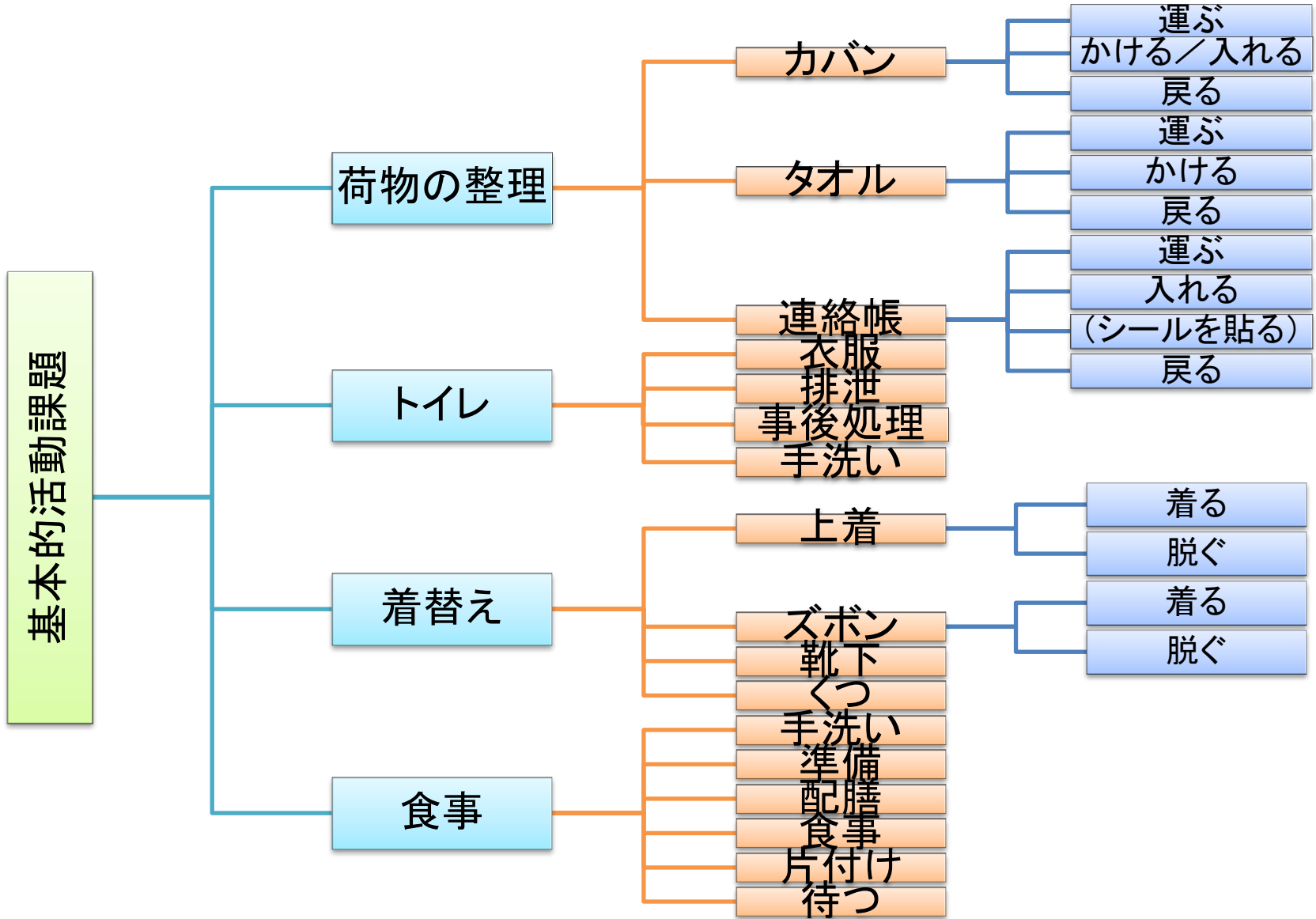
作業療法の視点

人と環境と作業との相互作用の中にあつて作業遂行の構造を把握しようとする視点



発達の視点に立った活動分析・作業分析によって作業遂行の構造そのものを把握しようとする視点

まずは 分類する



発達の観点を持った活動分析

- 我々はどう獲得してきたか
- どんな力の蓄積が要求されるか
- どんな力不足するから、今の姿になっているのか

**全体像をおさえて
発達支援・療育につなげるために**

チームアプローチ

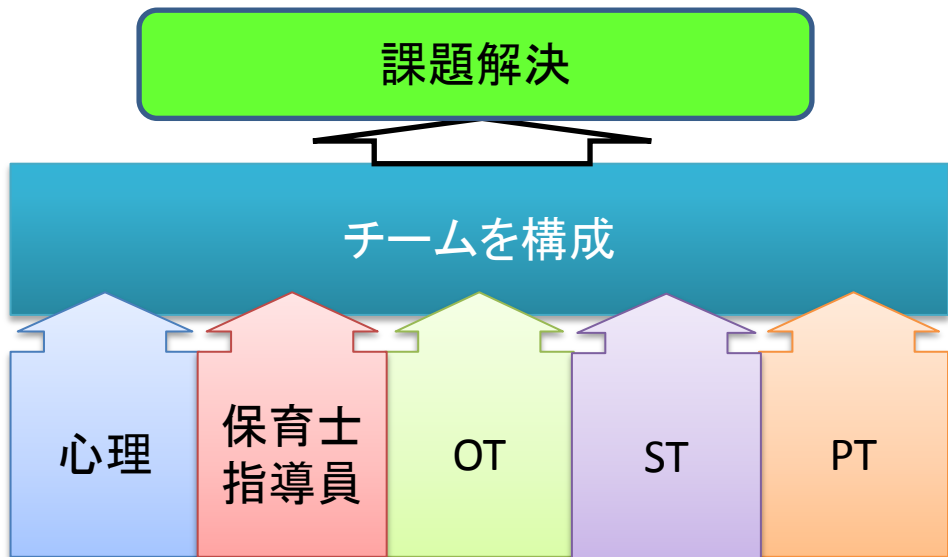
チームアプローチとは

学際的

- Trans-disciplinary 既存の学問体系の枠組みが崩れ、新しい学問体系が生じる
- Cross-disciplinary 複数の学問体系に及ぶ新しい専門分野が生じる
- Inter-disciplinary 複数の学問体系の共同作業により、新たな知を共有する
- Multi-disciplinary 複数の学問体系が共同で研究を行う

Interdisciplinary

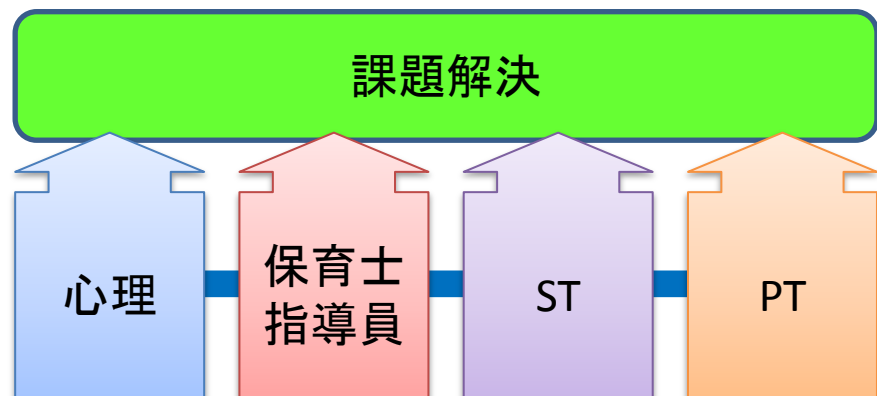
研究などがいくつかの異なる学問分野にまたがって関わる様子
チームアプローチ



Multi-disciplinary

複数の学問体系が共同で研究を行う
複数の職種が連携を取りながらケースにあたっていく

多職種連携



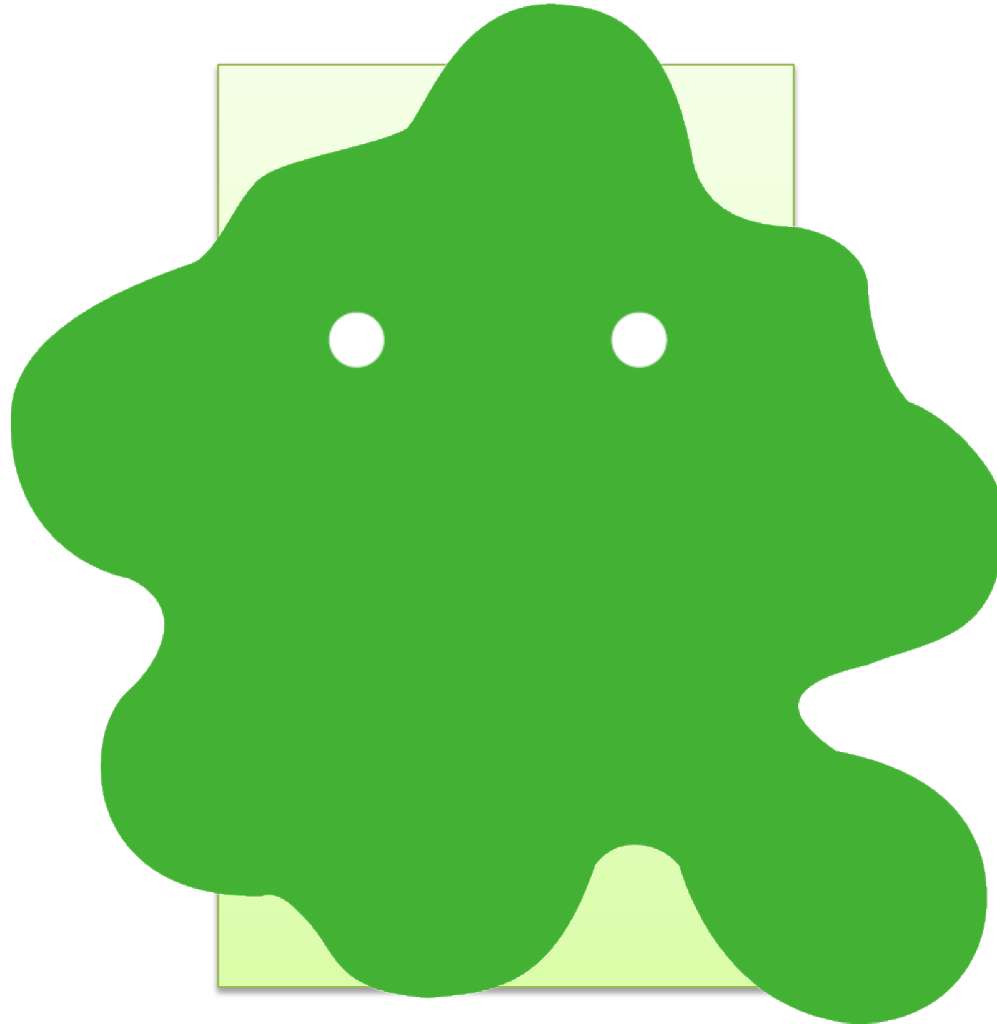
Cross-disciplinary

複数の学問体系に及ぶ新しい専門分野が生じる

新分野の創設

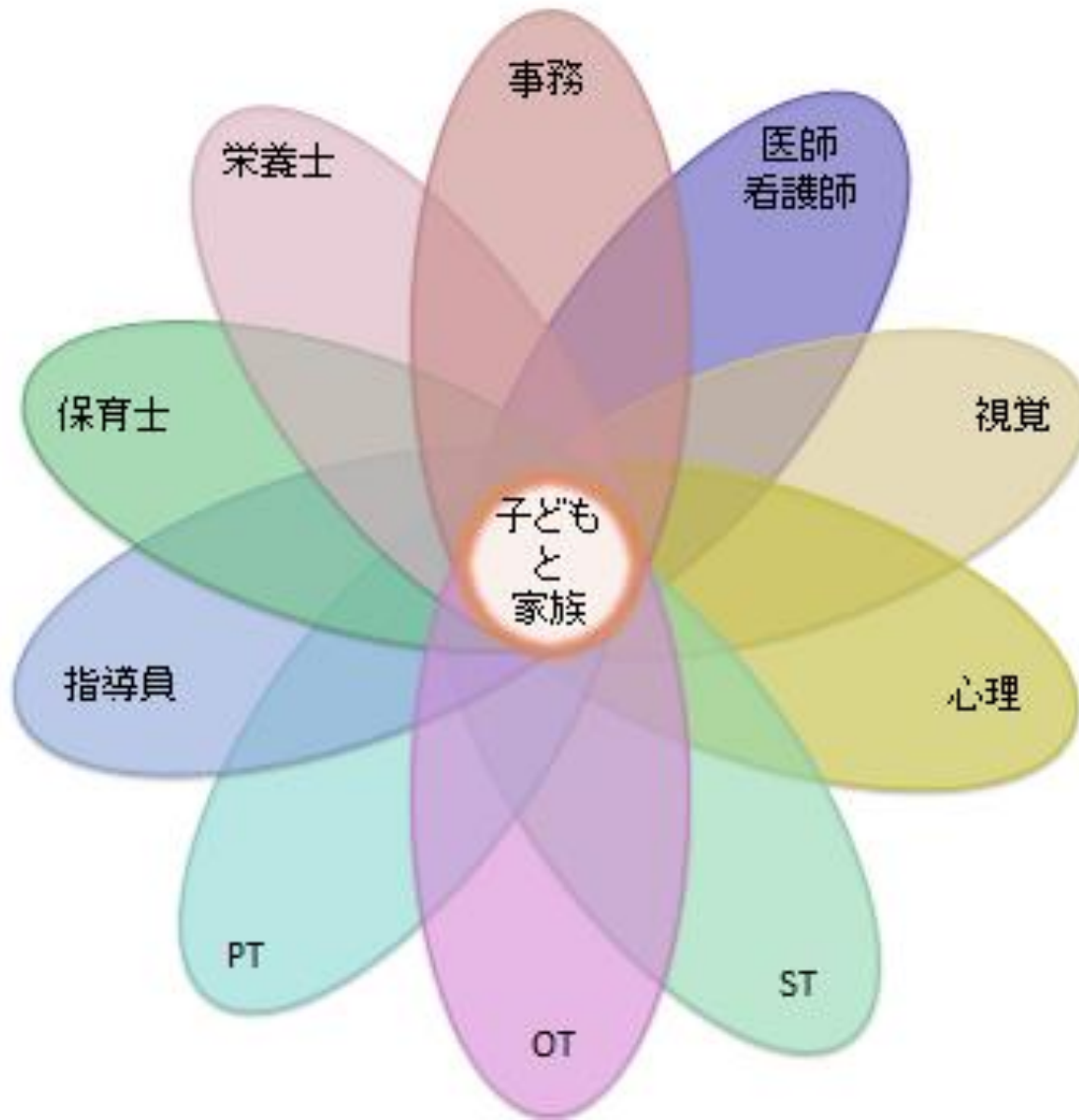
Trans-disciplinary

既存の学問体系の枠組みが崩れ、新しい学問体系が生じる



Trans-disciplinary

既存の学問体系の枠組みが崩れ、新しい学問体系が生じる

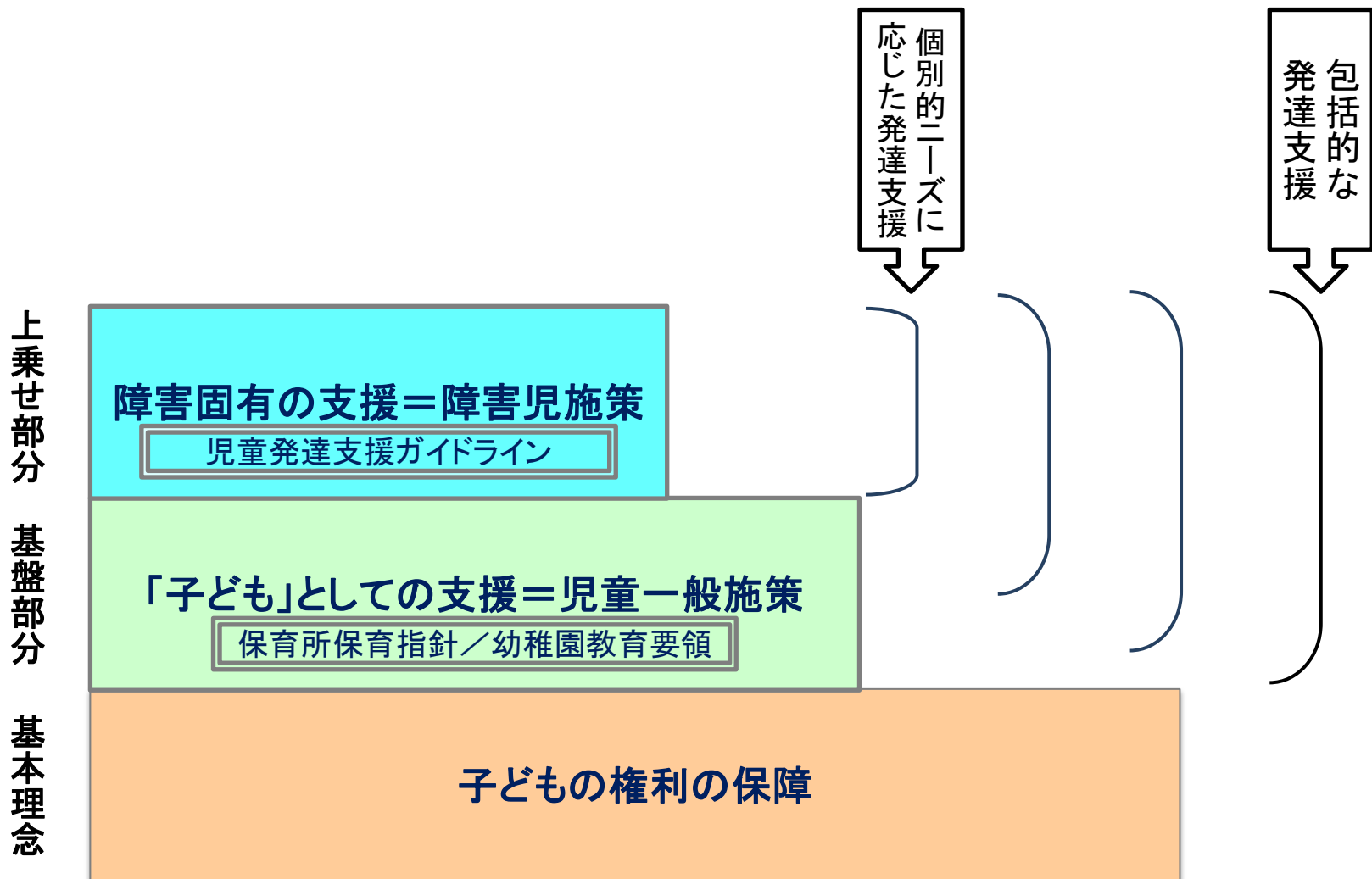


包括的なプログラムの提供

施設の役割は？

- 自分たちの施設、提供サービスはどんな役割を担っているのか
- 地域の中にあって、他の児童福祉施設だけでなく、一般子ども施策との間における役割分担の上での、役割付け・性格付け
- それによってカバーすべき内容が変わってくる
- 一施設だけですべての子どもに、包括的な発達支援を提供することは不可能。地域の中での役割分担が行われることが必要

多角的、包括的な発達支援



包括的な発達支援を提供するために

理念：一般目標

- 権利の保障
 - 権利条約
 - 子どもであっても一個の人間として権利が認められ、保障される

到達（行動）目標

- 包括的に育ちを支えるためにはどんなことが含まれるのか、求められるのか。具体的に何をすればよいのか（構成要素）
 - 内容：健康、人間関係、環境、言葉、表現
 - 活動として：年間を通じて、包括的に偏りなく、体験する
 - 方法として：ポジティブな養育の実践
- 固有の支援
 - 内容：それぞれの特性に応じた内容
 - 活動として：それぞれのニーズに応じた内容が提供される
 - 方法として：各専門性に基づく対応、特性に応じた対応

まとめ

振り返り

- 発達というキーワードで
 - 発達の全体像をとらえる
 - 発達の構造を把握する
- 氷山モデル
 - 内部構造に着目する視点
 - 環境との相互作用に着目する視点
- 発達の全体像をおさえた発達支援を提供するための体制
 - チームアプローチ
 - 施設の役割付け
 - 包括的視点

発達全体像

アリストテレス

「全体は部分の総和にまさる」

ゲシュタルト心理学

「全体は部分の単なる総和ではない」

発達の全体像

- 様々な専門性、見方、科学的知見を組み合わせ、足していくだけでは、「その人」を理解することはできない
 - 21pトリソミー、特徴的な顔貌、低緊張、知的能力、遂行機能、操作性、舌肥大、寿命、早期加齢……などが分かったところで、目の前にいる高橋穰太郎君とはどういう人間なのかはわからない
- しかし、これら科学的知見は無意味ではない
- それらの知見を総合して、そこから「その人はどんな人間なのか」という地点に、ジャンプアップすることが必要
- このジャンプアップは……難しい

発達の全体像をおさえる とは(酒井の私見)

- 現代の科学を総動員して(高木憲次)
- 対象となるその人はどんな人間で
- その人に、今何が起きているのか
- 今後何が起きるのか
- そのために、必要なことは何か
- を考えていくこと